

## 「地域に根ざしたコミュニケーションの活性化」についての私見

—次稿『能勢の人形浄瑠璃における創造性②』に向けて—

松浦 伸吾

### A Personal Perspective on "Vitalizing Local-Area Communication

—Leading to the Paper, "Creativity in the *Ningyō Jōruri* of Nose ②" —

Shingo MATSUURA

In a previous study I discussed the history of *bunraku* chanting (*sujojuri*) in Nose-cho, Toyono-gun, Osaka Prefecture, and the activities and characteristics of puppet theater (*ningyō jōruri*) in the same area. I also presented the reasoning that such creativity had two purposes: to vitalize local-area communication and to establish the performing arts as public entertainment in the present day.

This paper is a study that leads to my next paper, "Creativity in the *Ningyō Jōruri* of Nose ②". In the area of vitalizing local-area communication, there are three key phrases/concepts: urban and rural; interpersonal communication; and "artistic accomplishments. After presenting an overview of these concepts, I proceed to share my views on them. I believe these are vital concepts that pertain to the current activities of *ningyō jōruri* in Nose. I note the rise of amateur performers and provide an overview that focuses mainly on performing arts in the modern age flourishing as popular culture. I also touch upon the state of performing arts from the modern age to the present day. My aim is to explore precedents in vitalizing local-area communication and examine the elements that are still valid today.

In my next paper I will focus on the *ningyō jōruri* and *gidayū-bushi* chanting in the Kamigata (Kyoto-Osaka), Awa (Tokushima), and Awaji areas pursued as artistic accomplishments. I plan to discuss examples in present-day Nose using inferences derived from this paper.

構成	はじめに
	第1章 都会と地方
	言葉の定義
	歴史的概観
	中世と近世における都会と地方の様相
	地域格差の出現
	地域に残る価値の再発見と創造
	第2章 対人コミュニケーション
	概要
	生活環境の変化によるコミュニケーションへの影響
	対人コミュニケーションの重要性
	第3章 遊芸
	概要
	芸の習得
	近世における遊芸の効用
	近代以降の趣味
	現代における遊芸の復活へ
	おわりに

## はじめに

先の論考 [1] において、大阪府豊能郡能勢町における素浄瑠璃の歴史、人形浄瑠璃の創造とその活動、そして上演形態、諸道具 [2]、舞台の構造といった舞台様式や新作演目等における特色について述べた。能勢のオリジナルを、という意識のもと、古きものを尊重しつつも時代に即した新しい価値を積極的に取り入れ、平成の時代に新しい芸能として独自の人形浄瑠璃を生み出したその態度は、保存と伝承に重きを置く古典芸能として広く認知される既存の人形浄瑠璃とは異なっている。私はこの能勢町の取り組みを、創造的な活動である、と考えた。また、その活動には、「地域に根ざしたコミュニケーションの活性化」「現代における興行としての芸能の成立」という二つの目的があるという推論を提示した。

本稿は次稿『能勢の人形浄瑠璃における創造性②』へ導くための論考である。「地域に根ざしたコミュニケーションの活性化」において重要と考える3つのキーワード「都会と地方」「対人コミュニケーション」「遊芸」を扱い、それぞれを概観した後に私見を述べる。私はこれらを、現在の能勢における人形浄瑠璃の活動にも通ずるキーワードであると考えている [3]。それぞれの先例を紐解き、能勢の地域コミュニケーションへ応用できる要素を探ることがねらいである。素人芸能者が台頭し、様々な芸能が大衆文化として花開いた

近世の状況を中心に俯瞰しつつ、近代以降そして現在に至るまでの状況にも触れる。それぞれの私見においては他のキーワードの要素を多少なりとも含む内容となるだろう。

次稿では上方や阿波・淡路において遊芸や趣味として扱われた人形浄瑠璃と義太夫節に着目し、それらと本稿で導き出された推論をもって現在の能勢における事例を考察する予定である。

※〔 〕内の数字は稿末に記載の注釈番号を示す。

## 第1章 都会と地方

### 言葉の定義

私はこの論考において、「都会」と「地方」を反義語として扱いたい。

人が密集し、政治・経済・文化の“中央”として機能している地域のことを「都会」と理解して良いだろう〔4〕。「都会」と「都市」は同意語として扱われることが多いが、近代より首都圏を中央と捉え、それ以外の都市のことを総じて「地方都市」と呼ぶ傾向がある。東京に匹敵するほどの大都会である近畿圏でさえ、その中に含まれる。しかしこの論考では、文化の中心地としての上方を多く扱うので、「地方」の意味を若干含みかねない「都市」を使用することを避け、「都会」で統一したい。加えて「都市」と「都会」ではその規模における意味づけの有無が存在するようだ。「都会」は先述の要素を指すことに加えて、経済活動や人口等において規模が大きいことを条件とする。その最たるものを大都会と称する。現代日本においては東京と政令指定都市〔5〕を指すだろう。近世においてそれは江戸・大坂・京都の三都であった。ちなみに「都市」は規模の大小にこだわらないことを前提とする。「地方」は都会を省いた全ての地域を含める言葉として用いたい。そこには「地方都市」のいくつかも含まれるだろう。都会から離れた居住地域を意味し〔6〕、その同義語は「田舎」である〔7〕。しかしこの言葉は時に、人口や住居が疎の状態にあるという意味を与える場合があり、そうすると地方都市を含めることが難しくなるので、ここでは田舎の意味も含めた上で「地方」という言葉を使用したい。農村・漁村・山村・観光都市・城下町・宗教都市・宿場町等、その範囲は広い。少数の中央地域に対する大多数の“周縁”地域を、「都会」に対する「地方」とする。周縁とは現在、都市中央部の周りを囲む地域、つまり都心住宅地・工業地域・郊外などを含めることが多いが、本稿においてそれらは、中央部と地理的に連なっているという理由により中央地域の範疇に入れる。中央地域から地理的に離れており、それとは明らかに異なる生活・文化環境を有する地域のことを総じて周縁地域と捉えたい。

### 歴史的概観

「都会」と「田舎」という言葉が使用されはじめたのは奈良時代から平安時代であると

される〔8〕。その概念が成立したのは、飛鳥時代から奈良時代にかけて、当時の中国の都市を模倣する形で、現在の奈良の地に天皇の宮殿を置いた都城〔9〕が建設された頃ではないかと思う。この頃、朝廷の権力掌握と国家支配のための政治活動の一環として、天智9年（670）の庚午年籍と持統4年（690）の庚寅年籍という二度にわたる全国規模の戸籍作成が行われた。特に後者においては村落の編成がより重要視された。地縁的關係をより強固なものにさせ、租〔10〕・庸〔11〕・調〔12〕その他の税を効率よく徴収することが理由である。これによって「都城」に対する概念としての「村落」が新しく現れることになった。都城が建設される前は、農耕を中心とした生活環境を有する小規模の村が全国各地に広く分布しており、それぞれには首長つまり村を治める人物が存在していた。そしてそれらにおいて、規模の大小はあったかもしれないが、生活環境における差異はほとんど見られなかった〔13〕。いわば全てが農村であったために、それに対する概念が存在せず、よって対義語も生まれなかった。飛鳥時代の中央集権制の萌芽と同時に、日本全域を対象とした中央と周縁という対の概念が登場することになる。

延暦13年（794）、京都に平安京が建設された。天皇や貴族が居を構えるこの都城は平安時代における唯一の都会であり、その長期繁栄は地域の発展に大きく寄与することとなった。鎌倉時代以降は武士の台頭により権力者が目まぐるしく変わり、それと共に政治の中央が各地へ移った。その動向は、中央集権制が揺らぎ政情が不安定な状態にあった戦国時代において最も顕著であった〔14〕。しかし京都は、平安京の建設から中世末期までの約700年間、日本における首都であり〔15〕、唯一の中央つまり「都会」であった。時代は移り変われども、京都は他の都市と比べて市街面積や人口集中度等において群を抜いていた。戦国時代の頃、戦国大名〔16〕によって日本各地に城下町〔17〕が建設されたが、その規模において京都に匹敵するものは現れなかったようだ。また、政治の機能を他の地域へ譲ったとしても、経済や文化においては長きにわたり中央を担っていた。

ところが中世末期において大坂と江戸が新興都市として勃興し、後にそれらの規模は京都を凌駕することになる。近世の約270年間は江戸と大坂が都会に加わって三都となった〔18〕。つまり都会が三ヶ所に増えたわけである。それでも、それぞれは単体で独立して存在しており、現在に現れるような都市圏を形成しているわけではなかった。よって都会であるこれらの地域以外は全て周縁、つまり「地方」であり、そして「都会」とは異なった独自の生活環境を持っていた、とすることができる。「都会」と「地方」の様相は混合することが無く、双方の生活環境の差異は著しいものであった。この様相は中世から近世にかけての約1000年もの長きにわたって継続している。

明治時代以降は東京奠都〔19〕と後の東京一極集中〔20〕の進む中で、東京の規模が著しく拡大していくと共に、大阪と京都の立場は徐々に、中央から周縁へと移り変わっていった。しかしそれでも、この2つの都市は前時代の繁栄と価値観を受け継ぎ、伝統と個性を発する大都市として今も存在している。戦後の復興事業・人口増加・高度経済成長等により、日本各地に大規模な都市が多数出現した。特に関東や関西においては、複数の近隣

都市の区域がその拡大と共に相互に重なり合うことで、人口 1000 万人を越える大都市圏を形成することになった。様々な理由により地方からそれらの地へ移住する人々も多く、少数の地域への人口集中とそれに伴う地方の過疎化という二極化が進んだ。現在でもその傾向は著しい。

### 中世と近世における都会と地方の様相

総じて第一次産業に関わる地方村落の規模は、都会のそれと比較すると非常に小さいと考える。それはごく少数の構成員によって成り立ったコミュニティであるとも言える。また同一人物と関わる機会が多いという理由より、人々の結びつきが非常に強いことは想像し易い。加えて、土地に強く根付いたコミュニティであったこと、遠距離移動が容易にできなかったこと等から、外部からの影響を受けることが少なく、極めて変化に乏しい生活環境であったということも伺える。地方村落の生活は単純作業の反復である。狭義では毎日の生活スタイルの、広義では年々つまり四季の一巡を周期としたサイクルの繰り返しを指す。天災等で生活水準が上下することがあるが、その地に居を構えている以上は、辛抱をもってその生活を受け入れるしかない。近代まで、権力者の地方村落に対する厳格な支配と過酷な年貢徴収、そして各地方村落における、少数の支配層と大多数の被支配層という格差の出現とその拡大に、地方の多くの人々は常に困窮していたようだ。「地方」の概念が生まれたその時より、年貢の滞納と生活難が原因で、被支配層がその土地から逃げ出すケースがたくさん存在する。その中には都会へ入り出稼ぎを行う者もいたが、概して彼らの境遇は厳しいものであり、極貧の生活を余儀なくされた。江戸時代には幕府によって地方民衆の他領への逃散や移住が厳しく禁じられた。各地の大名はそのような事態にならぬように腐心した。それが破られた時、その地の大名には幕府からの厳しい刑罰が下ったのである。権力者当人の安全や地位のためにも、被支配層への縛りはより強固なものとなったのだろう。地方民衆の大半は百姓であり、その地位は士農工商の身分における農にあたり、武士階級の次に位置している。しかし実際は、重税による搾取に煽られ、永久的な生活難を強いられた人々がほとんどである。

しかし中世における平安京ないしその後の都会としての京都の様相は地方のものとは極めて異なっていた。貴族・豪商・有力人といった身分の高い人々が住んでいたこともあり、税の負担が非常に軽かった。近世に入ってもその慣習は受け継がれ、百姓よりも身分の低い職人（＝工）や商人（＝商）が主である三都の人々は納税の義務を免除された〔21〕。よって都会の人々の生活は、地方の厳しい状況に比べると幾分かの余裕を有していたと想像することができる。都会は狭く限られた敷地内に住居が集まっており、その人口密度は地方のものとは比べものにならないほど高い。そのことは人々が互いに無意識のうちにすれ違う生活環境を用意する。平安京が建設された時より各地の有力者がこぞってその地に移り住んだことからその傾向は始まり、その後も居住人口は増え続けた。様々な業種の人々が集うこととなった。そこに住む人々の生活スタイルも十人十色であることは言うまでも

ない。よって都会の人々は短距離の移動で、実に多様な価値に触れることが可能である。

地方には結束力の非常に強いコミュニティがあるということ为先述したが、都会のコミュニティはどうか。長らく都会であり続けた京都は数度の戦災に遭った歴史を持っている。応仁元年（1467）より11年間続いた応仁の乱によって京都は一度廃墟と化した。ほとんどの建築物が焼失し、人々は戦火を逃れるためにその地を離れた。それまでに形成されていた地域コミュニティはこの戦乱を期に刷新されたのだろうか。江戸と大坂は江戸時代に栄えた新興都市であり、歴史は浅い。また、都会は非常に多い人口と様々な価値を有するので、確かに幅広い人間関係を築く機会を持ってはいるが、個人対個人の関係は浅いものとなるのではないか。よって都会は地方よりも縁が緩く、地域に根付く強固なコミュニティというものなかなか見つけられなかったと考える。しかしそれでも都会、特に上方には商工業におけるコミュニティが存在している。同業者仲間がひとつの居住地区に集合して住んでいたことが理由のひとつであり、その生活環境が自然とコミュニティを形成させたのだろう。また単一分野における、同身分内の他業種との連携も頻繁に行われていたに違いなく〔22〕、そこでも何らかのコミュニティが生まれたように思う。

### 地域格差の出現

近世までの都会と地方の様相を中心に概観したが、そこにははっきりとした差異を見て取れる。先述のように、地方の農民は他の身分と比べると困窮を強いられるような状態にあり、片や都会の人々にはまだ、生活の安定を伺うことができる。しかしこれは格差とは呼べない。それぞれの環境があまりにも違いすぎるので、同じ天秤にかけて生活水準の比較を行うことは難しい。それらの生活は江戸時代以降、士農工商という身分階級によって固く守られることになる。身分を越境することは許されていなかった。よって人々は、当人が置かれた様々な状況を全て受け入れることを余儀なくされた。しかしそこからどのように楽しみを得るかを考え、実践してきたのである。そこで遊芸が大きな価値を持った。もちろん、遊芸の扱われ方は都会と地方では著しく異なる。詳しくは第3章で述べる。

中央と周縁における格差が現れ出したのは近代以降であろう。鉄道等の交通手段の整備と交通網の拡大は中央と周縁との行き来を可能にし、それは時が進み技術が発展すると共に、より容易となった。通信手段の発達は無視した情報交換のコミュニケーションを可能とした。マスメディアの出現とその発達は、発信地の価値観や文化を情報として瞬時に全国へ拡散させ、多少の強制力を持って浸透させた。そしてその発信地として君臨したのが、明治時代以降首都として位置付けられた東京である。インターネットの普及によってその状況は多少緩和しているようにも思えるが〔23〕、それでも現在、東京の地方への影響力は大きい。

地方の人々にとって、都会はある意味、非常に身近なものとなったと思う。言い換えれば、流行や慣習等を含めた都会の様々な情報が常に満たされている環境が、地方に既に用意されている、ということである。人々は都会に足を運ぶこと無しに、それらを選択して

受け取ることが可能である。しかし実際は、それらを無意識のうちに取り込んでしまっているように思う。結果、地方に住む人々にとって、都会から流れてくる価値が現代日本の標準であるという思考の転換が多少なりとも行われたのではないか。ひとつの例として、地方におけるコンビニエンスストアの濫立や巨大ショッピングモールの建設等が挙げられるだろう。建築物の姿・室内空間・流通・扱われる商品・販売方法等、都会的な価値をたくさん有している。それらが建つことによって、その都会的な価値が地方の生活環境に溶け込むことになる。それは地域の持つ既存の個性を無視したところで行われている。人々はそれらに魅力や利便性を発見した後に頻繁に利用し、次第にその活動を習慣化させる。地域に残った既存の個性は新参の価値の影響力の前に存在感を失う。次第にその地域性は刷新されていくだろう。地方においても都会の価値が膨れ上がっていく。地方の人々は都会が発する標準性と地方に残る地域性という、二つの異なる価値を抱えることとなった。これは様々な混乱を生み出した。それに対し都会に住む人々の標準性と地域性はほぼ同様の内容であるので混乱は生まれにくい。地域の人々がその二つの価値を比較したとき、極めて多様な差異を発見することになるだろう。そして標準的価値に劣る内容を地方の状況の中で発見したとき、それを格差として否定的に捉えてしまうことがあるのではないか。これは都会と地方における地域格差の発端のひとつである、と私は考えている。否定的イメージが先行したのではないか。

この状況がはっきり現れたのは戦後、特に高度経済成長期であろうか。都会に住むことによって経済的・文化的な豊かさを得ることができる、という風潮があったようにも思う。近世より始まった地方の人々の都市部への移住への傾向はこの頃より拍車がかかった。都市部における求人がこの頃に急増したことが大きな理由のひとつである。都会の魅力を十分に語った広報活動も頻繁に行われていた。また、移住への嗜好は特に青少年にも見受けられる。居住地域への疑問と都会への憧憬を持った若者が増加し、地方を飛び出すケースも顕著であった。これはマスメディアが発信する情報からの影響も大きいだろうと思う。地方の若者が大学進学や就職を機に都会へ住み、その後地方へ戻らずその地に永住することも多い。これらの現象は地方の生活環境に変化をもたらした。人口減少や高齢化に直結しており、若年者人口の減少は地方の政治経済や文化の活動にも大きな影響を与えた。地方の主要産業である農業の衰退が著しい。職能や芸能の継承においても、継承者不在という理由により困難になった。これらは地域内におけるコミュニティ形成を担う活動でもあったため、それが滞ることにより、過去から繋がるコミュニケーションの場と機会を失った。否定的イメージから始まった格差は実体となって社会に現れた。その傾向は現在にまで続いている。

### 地域に残る価値の再発見と創造

しかしここ最近において、都会に住む人々による地方への憧憬や移住願望が現れてきた。自ら好んで地方へ移住する I ターン現象や、地方出身の人々が一度都会に移り住んだ後に

再び地方に戻るUターン現象が見受けられ、その数は増加の傾向にある。都会における喧騒・環境汚染・騒音・出費過多・教育環境の悪化等、その原因は多い。これは世界的においても最大の規模を有する超過密都市・東京においてより顕著である。これらの問題はすぐに改善することが困難であると共に、遠い過去より都会の個性として無意識のうちに理解されてきた。地域格差が如実に現れた時期において、都会へ居住した人々はこれらの諸問題を都会の標準的な生活環境として認識した上で適応することを余儀なくされた。しかし現在、交通や情報におけるインフラ整備の推進により時間的・空間的距離を克服したこと、またそれらの手段を誰もが使用できるようになったことにより、都会と地方の差異というものを個人それぞれが把握した上で、個人の判断において双方を自由に越境して立ち振る舞うことが可能となった。近年の例として九州新幹線の開通を挙げることができるだろうか。これは九州の中心である福岡とその周縁地域との距離を著しく縮め、九州内の人々の移動をより活発にさせるであろう。もちろん他の地域においても、延伸や新規開発の計画が進行中である。また在来の新幹線においては、その移動時間の短縮のための研究と実施が随時行われている。様々な地域をたくさんの人々が行き来することで、実に多様な感性が広域を循環することになるだろう。そのことは地域に元来存在していた価値の再発見を促し、後にはそれらを応用した豊かな創造活動を展開するであろうと考える。それは地方発祥の新しい魅力となるに違いない。そしてその魅力は他の地域に大きな影響を与え、その地における再発見と創造を誘発する。価値創造の連鎖が全国的に行われるのではないだろうか。また、近年大いに謳われている地方振興の一環として、第一次産業の再認識や地方の魅力の紹介なども頻繁に行われている。特に広報においてはインターネットの活躍が目覚ましい。ここ数年における活発なエコロジー運動の影響もあるだろう。これは大量消費社会に対する反省と未来への模索として捉えることができる。過去から長きにわたり消費環境を用意してきた大都会に対する異議申し立ての活動であると言えるのではないか。

地方を居住地域としながら都会へ移動することがより容易になった。またその逆も然りである。もちろん従来のように、都会または地方のどちらかを選択してその生活環境に留まることも可能である。個人の事情をより優先した生活スタイルを選択する自由を得たのではないだろうか。その事情とは職業・人間関係・嗜好等、人によって様々である。もちろん嗜好の中には伝統文化や芸能も含まれているだろう。今後もこの傾向は加速度的に進行すると考えられる。近い将来、東京の生活習慣をスタンダードとして全国的に共有されたことで現れた地域格差に替わる、新しいスタンダードが生まれてくるのではないかと私は考えている。地域ごとの個性が色濃く現れ、全国各地に併置されるのではないかと。全ての地域が情報発信の中心となる日は、そう遠くは無いように思う。

## 第2章 対人コミュニケーション

### 概要

人と人の中で交わされる知覚・感情・思考の伝達と享受が双方において偏り無く行われることをコミュニケーションと呼ぶ。聴覚や視覚に訴える方法をとることが一般的であるが、嗅覚や触覚に作用するものも存在する。コミュニケーションは人間以外の動物の間でも頻繁に行われるが、それは身振り・音声・表情・フェロモン等の生理活性物質、スキンシップといった、より本能的な所作によって行われる。よってその内容も、個体の本能に基づいた直感的情報の交換が中心となるだろう。しかし人間は言葉を使用することを覚え、後にそれを巧みに操ることになる。本能的または動物的な活動や態度に対して言葉で考え、結果それらを自らの意思でコントロールすることが可能になった。内容をより具体的に、思案的に、時にはその範囲を膨らませたり、または狭めたり、感情を加えたり抑えたりしながら対象者に伝達できるようになった。それは情報の幅が著しく増えたことを意味している。それが現れた当時は、対面した2人以上の人間間による音声のやり取りが言語コミュニケーションの唯一の方法として扱われていたこともあり、それ自体が実体を持つことは無かったが、後には、人間にもともと備わっていた道具使用能力の発達と文字の発明によって、言語化されたその内容を様々な媒体に記憶させることを可能とした。その内容はモノとして実体を持ち、保存ができるようになった。石や岩など、その地に固定された物質に直接彫り付けることから始まるが、後にそれは木や竹といった携帯の可能な物質へ、染料や顔料を使用して書き記すことに移行していく。これによりその記録物を移動させることができるようになる。紙の発明は画期的であった。大量生産と大量流通、そしてその取り扱いの容易さも含めて、紙の使用は広く浸透し、それに伴って紙を使用したコミュニケーションが発達した。最も重要なものは手紙だろう。対人コミュニケーションにおける距離は著しく拡大し、遠方の人との情報伝達を行うことが可能となった。後の印刷・出版によるマスメディアの出現と発達、または情報の大量伝達とその拡散においても、紙があってこそその出来事であった。美術も視覚的記録としてコミュニケーションに大いに役に立った。それは絵文字〔24〕の存在からも確認ができるだろうと思う。絵画は写真や映画が現れる前において、空間をそのまま切り取ってそっくりそのまま保存するツールとして重宝されていた。よってその画法は写実を基本としていた。この傾向は19世紀中前における写真の発明〔25〕の頃まで続く。

記録物を用いたコミュニケーションにおいて言えることは2点であり、発信者から享受者への情報の移動距離の長短とその経過時間の長短は概して比例の関係にあって、大なり小なり必ず時差が生まれるということ、そして記録物が朽ちない限りそれは永久的に保存され、それが製作された後の未来においてそれに触れた時、その未来から見た過去の一瞬間または一持続時間を伺うことになるということである。つまりこれらには双方における同時間の共有が皆無である。享受者は発信者が過去に発した情報を受けとることを前提と

する。しかしかの時代における記録物の情報とはそのようなものであり、当たり前のことであった。ところが“今”を知りたいと望む傾向というのは過去も現在もそう変わらない。時間的制約を乗り越えて、出来る限り早くそれを他者に伝達したい、と考えるのだろう。だからこそリアルタイムな情報交換の場を求めて、人々是对話の機会を持とうとしたのかもしれない。それは18世紀から19世紀の西洋におけるクラブやサロンの勃興への影響を多分に与えているのではないか。また逆説的に、それらが勃興することによって対人コミュニケーションが再興または発展することにもなっただろう。様々なコミュニケーションツールが生まれてくる中でも、対話はコミュニケーションの標準として捉えられ、その価値は長きにおいて保たれていた。

### 生活環境の変化によるコミュニケーションへの影響

コミュニケーションの形は生活環境の変化に大きな影響を受ける。そして生活環境の変化における強度や速度は多種多様である。自然を例にすると、徐々に進む地球温暖化、突然の天災、空梅雨、虫の大発生等が挙げられるだろうか。もちろん自然だけではなく、政治・経済・科学技術・教育・文化・流行等、あらゆる分野においても同様であり、それらは生活環境に何らかの影響を及ぼす。また、それぞれが相互に変化を誘発しあっている状態にある。よって環境の変化というものは、影響力の強弱はともかく、日常茶飯事の出来事として過去から現在まで途切れることなく続いている、という事が出来るだろう。それでも人々は、誰もが多かれ少なかれ有している環境適応能力をもって、比較的ゆるやかに、新しい環境へ順応してゆくだろう。そして同時にコミュニケーションの形も流動的に移り変わると思う。言い換えれば、それは時に無意識のうちに行われ、いつの間にか新しいコミュニケーションの形に“切り替わって”いる。つまり、コミュニケーションは生活環境に従属している、と言えるのではないか。

19世紀中期以降に発明された電話〔26〕・無声映画〔27〕・蓄音器〔28〕は、それまでには誰も想像しなかった革新的なコミュニケーションを提示することになった。電話は対人コミュニケーションにおける地域的・時間的な制約を大きく解消することになったと同時に、遠方へのコミュニケーションにおける必須のツールとして長く重宝されていた手紙の意味と効用を変化させた。無声映画は視覚情報を、蓄音器は聴覚情報を切り取って固定、編集し保存することが可能となった。これらの登場により、それまでのコミュニケーションの基本的性質であった、伝達と享受における相互の平等性が揺らぎ、発信側と受信側の二極化が現れることになった〔29〕。20世紀に入り、リアルタイムで情報を発信するラジオやテレビが登場することによって、その傾向はより強化されていくことになる。無声映画と蓄音器の改良と様々な合体または融合は、それらが出現した頃から積極的に行われた。トーキー Talkie〔30〕は聴覚と視覚の両方の情報を操作することができた。科学技術の進歩により低価格で量産されたレコードは、切り取られた聴覚世界を個人で所有することを可能とした。ビデオテープやカセットテープ等の記録メディア、またはそれらに記録を

行う機材の量産化と低価格化により、個人の自由で視覚・聴覚世界を扱えるようになった。1980年頃には携帯電話が出現、対話のためのツールを自由に持ち歩けるようになった。インターネットは全世界に向けての発信と全世界からの受信を個人の選択によって自由に行うことのできる画期的なツールであった。よってテレビやラジオが広く普及した後に浮上した、発信者における情報の独占や独裁的情報操作といった問題がいかほどか改善されることになった。技術の革新とその開放〔31〕は昔から今に至るまで活発に行われている。そして現在、誰もがあたりとあらゆるコミュニケーションの手段を手中に収めることができる権利を持っている。またその質や利便性は飛躍的に向上している。この動向はこれからも続くだろう。今や、交流への手段はあまりにも多様で、そしてあまりにも複雑であると言える。対人コミュニケーションはその中の、ひとつの選択肢として存在するに過ぎない。

### 対人コミュニケーションの重要性

現在進行しているコミュニケーションの形に着目し、過去の事例を比較し検証することでメリットとデメリットを考察し将来の姿を模索することは、何も今に始まったことではない。日本において戦後より現在まで長く言われている問題として、人間関係の希薄化が挙げられる。ここ最近では人間関係の簡略化という問題も広く取り上げられている。先述の、コミュニケーション手段の増加と氾濫が大きな理由のひとつであることは間違い無いだろう。19世紀末頃まで、対人コミュニケーションは時間的・空間的制限により、かなり狭い範囲の中で日常的に行われていたと予測できる〔32〕。またその中にいる人々はお互いに、様々な条件を共有したコミュニティの構成員として理解しあい、非常に密接な人間関係を暖めていくことになったのではないかと考える〔33〕。個人が一生のうちに関わりを持つ人数は、今から考えれば非常に少なかつただろう。しかし後に、数々の画期的なコミュニケーションの出現によってその制限が著しく緩和された。不特定多数の人々と容易に繋がってあらゆる情報の伝達・享受が一個人で手軽に行うことができ、またそれらを一個人で完結させることさえ可能となった手段が現れた今、他者と対面した交流を行う必要性が緩んだようにも見える。効率を考えると前者を選択することが多いだろう。しかしそれは、対人関係を切り捨てて構わない、ということにはならない。社会に属する以上、多数の他者の存在を認識し、それと自己との違和感を普遍的なものとして捉える必要がある。それを円滑に進めるためには他者との関わりが不可欠である。そしてそのノウハウの形成は、この世に生まれた時から無意識のうちに、または物心ついた後に意識的に獲得される、家族・親戚・隣人・地域・宗教・趣味等で繋がるコミュニティ〔34〕の内側で行われる、人間関係の体験や経験によるのだろうと考える。過去においてこれらは、あえて必要性を言及するまでもない、至極当たり前のことであった。しかし今では意識的に、それらに取り組むことが急務ではないか。様々な仮想的コミュニティが頻発し、実体を持たない形でコミュニケーションすることを容易とする今、現実的なコミュニティとコミュニケーションの姿が影に隠れてしまい、その重要性を軽んじられる傾向にあるように思う。それにより、実

社会において他者との関係を円滑に進めるために必要な学びが疎かになりはしないか。家庭内や義務教育機関内における生活環境がそのような状態である場合、子供への影響はどのようなものになるのか。またそのような子供が成長し大人になった時、その当人は実社会との関係をどのように計り、どのように自己とのバランスを保つのか。時に重大な事態を招くことになりはしないか。ここ 20 年ほどの殺人事件には、対人関係の不具合から発するものも結構あったのではないか [35]。

私は、今の生活環境を再確認し、より良い状態に整えることで、職業や地域といった様々な種類のコミュニティが生まれる、または息を吹き返すような状況を水面下で創造し、対人コミュニケーションを誘発することが重要である、と考えている。さらに、コミュニティの中心的素材が趣味や娯楽の共有または共創であった時、共通の楽しみの時間を皆で分かち合える、という理由により、豊かな人間関係を無意識のうちに生み出す結果となるだろう、とも思う。喜の感情が持つ力であり、それは時として怒りや悲しみといったマイナス感情を瞬時に吹き飛ばしてくれる。しかしこのことは別に新しいことではない。今でもクラブ活動やサークル活動を行う団体は日本各地に存在しており、そのことを既に実践している。自治会や村落における祭事の開催とその伝承においても、同様の価値を有しているだろう。さらに加えて、それぞれの催しの後に行われる「打ち上げ」等の親睦会は、対人コミュニケーションをより促進させるものとして重要であると考えている。

ヴァーチャル・コミュニケーションとそこから派生するヴァーチャル・コミュニティの台頭により、リアル・コミュニケーションまたはリアル・コミュニティが減少傾向にあり、現在もその状態にある、ということだろうか。その減少が促進されることで対人関係がより弱まった社会が形成されるだろう。これを将来増加に転じさせるためにも、なおさら娯楽に注目することが重要ではないか。もちろんこのことに関しても先例が存在し、その一つとして、これから述べる、江戸時代における遊芸の事例を挙げることができるだろう。人々は遊芸をもって繋がり、コミュニティを形成していった。歴史から再発見した価値を現在に応用し、未来を再創造することは有効ではないか。私はこのように考える。

### 第3章 遊芸

#### 概要

まず現在における「遊芸」の意味を文献より参照する。

【遊びごとに関した芸能。謡曲・茶の湯・生花・舞踊・琴・三味線・尺八・笛・香・講談・浪花節・落語・俗謡など】

『広辞苑 第五版』1998 岩波書店

【遊び・楽しみのためにする芸。歌舞音曲・茶の湯・生け花など。】

『大辞泉』1995 小学館

実用性を持たない、遊びや楽しみのための芸能である。「趣味」に通ずる内容であると考えて良いだろう。ちなみに「趣味」という言葉は、近代以後に「遊芸」と切り替わる形で使用され、現在にまで浸透している。「遊芸」という言葉が世間一般に扱われ、「遊芸」が民衆全体に親しまれるようになったのは江戸時代からであろうか。

「数寄者」[36]という、アマチュアとして芸事に執心した人々がいた。「数寄」とは「好き」の当て字であり、この言葉が現れたのは平安時代の末期であると考えられる[37]。その時代、「好き」とは人・物・芸能という多方面の対象を包括した好感情を指すが、後に新たに「数寄」を用いることで、恋愛や好色といった対人関係に関わる概念を避け、「風流」[38]という、華美にこだわった趣向に傾倒した内容を前面に押し出すことになる。貴族や官人による音楽[39]や歌道[40]への愛好から始まり、後に様々な芸能が加わっていく。生け花（現在の華道）と茶の湯（現在の茶道）は室町時代より後、「数寄」を代表する芸能となった。後にこの言葉は茶の湯において、既存の意味に加えて「数寄茶」[41]「数寄屋」[42]といった、茶の湯における所作や雰囲気を表した内容が含まれるようになる。ましてや「数寄」と茶の湯を同意義として捉えることも少なくないようだ。今の「数寄者」とは主に茶の湯へ執着する人々をいう。江戸時代における「遊芸」という言葉は、「数寄」の意味が時間の推移と共に変化して狭義に限定されてゆく中で、遊びのための芸という元来有していた意味を示すために改めて用意され、広まったものなのかもしれない。

## 芸の習得

「遊芸」を楽しむためにはその芸を行うための技術を習得することが必須であり、その方法は主に二通りであったと考える。ひとつは独学である。これは楽器等の、道具の操作に特別な技術を必要とする芸能を避けた、比較的容易に真似をし易いジャンルが多かったのではないかと想像する。平安時代の農耕芸能が後に遊芸として親しまれるようになった田楽[43]、鎌倉時代において貴族から民衆までの幅広い層に浸透した連歌、琵琶法師による平家や浄瑠璃等の語り物、室町時代に大成した能楽[44]またはそこに含まれる舞や謡といった類である。人々はそれらの芸を観聴し、その魅力に触れ、自分でもやってみたいと思い、独習して真似事を始めた。諸芸における指南書または謡本[45]や浄瑠璃本[46]等の詞章を記した書物は古くから存在していた。江戸時代における書物の大量出版によりそれらが広く民衆の手に渡った[47]ことは、独習の遊芸者が飛躍的に増加したひとつの要因となったように思う。遊芸の楽しみを覚えた人々の次の目標は、芸の洗練または上達への欲求であると考えられる。諸芸における先達のプロの技芸に興味や感動を覚え、後に遊芸へと誘われた人々にとって、その芸に憧れを持ち、目標として設定することは容易に想像できることである。では、独習のみで芸能専門家の卓越した技芸の習得を行い、その表現

に近づくことが可能なのか。確かにそれを達成できた人もいたかもしれないが、その数は至極僅かなものであったと考える。それは現在のアマチュア事情と比較しても同じである。

そこで、もうひとつの方法として、諸芸における専門家を師匠と仰ぎ、弟子となって直接技芸を習うことが挙げられる。これは日本に芸能が誕生した頃から現在に至るまでの長きにおいて続くスタイルである〔48〕。平安時代の雅楽奏者である源博雅〔49〕が歌人であり琵琶の名手でもあった嵯丸〔50〕から琵琶の秘曲を伝授された、という逸話〔51〕がある。その真偽は分からないが、この頃には既に専門家の芸の教授が行われていた、という事実を伺い知ることができる。客観的視点を得て自己中心的な解釈から脱することで、より効果的な学びを得ることが可能である。その師匠の技を間近に触れることができる、ということも重要である。一人で学ぶことと師匠に習うことでは、後に芸の理解と技術の上達において大きな差が生まれるのではないか。特に三味線や箏といった、指南書だけでは全ての技芸や微細な表現方法を網羅出来ない日本楽器の演奏技術の習得において、指導する人の有無はその技芸の優劣の具合を極めて広げることになるだろう。しかしこの場合、弟子は師匠へ指導に対する何らかの謝礼を支払わなくてはならない。その額がいかほどのものかを計り知るとはなかなか難しいが、生活のための糧とは別に、余暇のための蓄えを十分に持っている比較的裕福な人々が、諸芸に没頭することを可能としたのではないか。

### 近世における遊芸の効用

江戸時代の都会つまり江戸や上方には、商人がたくさん住んでいた。彼らは士農工商の身分階級の中で下位に位置する。しかしその生活は困窮や苦痛を強いるようなものでは無かったようだ。農民のように、自然災害によって生活が翻弄されるようなことは少ないだろう。彼らは商いをもって蓄えを増やし、生活を安定させ、余暇のためのお金を準備し、遊芸に費やした。豪商、つまり商売の大繁盛により財を築いた商人も存在した。彼らの遊芸への出資も豪快であった。遊芸は中世まで身分の高い人々を中心として親しまれていたが、近代に入ると元々の遊芸享受層に町人が加わり、身分を越えて広く浸透した。町人の台頭と共に素人弟子が急増した。指導者はたくさんの弟子からの謝礼により、生活をより安定させることができた。遊芸人口の増加は芸能興行の観客増員へと繋がった。よって興行団体の業績は良好であったと想像する。街の生活環境に遊芸の香が立つようになったことで、芸能への興味を促す風潮が現れたに違いない。この時代、遊芸は町人へ根付くことになり、元禄年間（1688～1704）前後における「元禄文化」を担うひとつの大きな要因となった。町人文化の勃興である。

この頃の上方の遊芸にはどのようなものがあつたのか。先行文献より抜粋する。

【井原西鶴〔52〕が町人物〔53〕のなかで列挙した諸芸—中略—

論語、詩文、連歌、連配、有職、能、鼓、箏、一節切、浄瑠璃、踊、小歌、滑稽、曲芸、口上、書道、茶道、立花、香道、蹴鞠、楊弓、囲碁】

『遊芸文化と伝統』より

【仮名草子『悔草』（生保四年<一六四二>刊）の一節には、「一中略—学文・よみ書きは佐太に及ばず、医道・歌道・茶道・音曲・つゞみ・仕舞・躰方・算勘（計算）など、其の外あらん。武芸はしらず、かやうの物、一道ならひえて持つようにあらまほし」とある。一中略—いずれも「諸芸さまざま」として同列にあつかわれていた。】

【佐藤直方〔54〕は、「予、年来、欺く事あり。学問を一芸として、儒者・医者・仏者・天文者・軍方者・歌者・俳諧師・陰陽師・碁所の類と、一同に思うは、口惜しき事也」といっている。】

『元禄文化—遊芸・悪書・芝居』より

現在において芸の範疇に入るものの他に、女色、男色、医学等の学問なども芸に含まれ、それら全てに指導者と弟子が存在したということは非常に興味深い。『京羽二重』第六巻「諸氏諸芸」の項において、47種の「諸芸」が掲載されている、とのことである〔55〕。江戸時代の遊芸は、実に幅広い分野との関わりを持っていたようだ。

遊芸は娯楽や経済の発展のみではなく、人間交流にも寄与することになった。近世には厳しい身分制度が定められていたことは先述の通りだが、遊芸のコミュニティ内においてはそれが全くフラットになった。プロの芸能者は総じて身分が低い人が多く、それは士農工商の下に位置する被差別民の中に含まれていた。過去より被差別民は上の階級から虐げられてきた存在であったが、遊芸の世界においてはそれらの階級の逆転が起こっていた。芸能者が師匠となり、それより上の身分である町民階級〔56〕を弟子として迎えることになる。豪商と雇われ商人が同じ立場で横に並ぶことも珍しくない。加えて、弟子同士の関係においても、芸暦を優先した特有の上下関係が存在したのではないか〔57〕。そしてそれは、現実社会において当たり前とされる序列を全く無視したものであったと想像する。この仕組みは都会において、身分や職種を越えたコミュニケーションを生み出す結果となった。普段の生活においてなかなか関わりを持たないであろう個人同士が、遊芸を仲介させた上で自由に交流を行うことができる場が用意されることになる。それは下流町人における身分向上の気運を刺激することになった。また都会において、遊芸のいくつか、例えば華道や茶道等は教養としても機能しており、身に着けることが望ましいと広く認められているところがあった。人々は教養を手中に収めることによって自らの格式を上げようと努力する。町人はそれらをもって、遊芸コミュニティ内において権力者や豪商に近づいていく。遊芸の集いは世渡りの場としても機能していたようだ。これらは都会における遊芸の特性を、つまり個人で所有することができる学術や技芸が選好されていたということを示している。遊芸は交流を新しく創り出すための手段として機能していた。

それに対して、地方における遊芸の様相は少し異なっていた。各地域に存在する村落または地区単位において、地縁に由来した伝統的コミュニティが既に形成されており、その

内部の繋がり是非常に強い。またその構成員はほぼ農民で占められており、そこには身分階級の差を発見することが難しい。忍耐を強いる重労働を延々と繰り返す農業従事者の生活は変化に乏しく退屈であることが多い。このような日常に活力や彩りを与えるために、祭や年中行事などの開催を含めた非日常の機会を設定する。過去より継承される民俗芸能や儀式の上演はもちろんのこと、江戸時代以降にプロの芸能者がもたらした芸能が遊芸として扱われるケースも少なくない。特に歌舞伎や人形芝居といった、業務の分業化と複数人数による共同作業を前提とするジャンルが好まれたようだ。これらはどの業種が欠けても舞台は成立させることができない。それぞれは強い責任感を持ってその業務を遂行しなければならない。しかしそのことが他者との共創への意識を高める結果となった。その準備段階からコミュニティ内の人間関係を深めていくことになる。それは農作業におけるコミュニティ内の協力関係と連携しているように思う。他の例として、盆踊り等の群舞を挙げることが可能であろう。舞そのものは演者ひとりで完成させることができるが、しかし群れて舞を演じることで非日常の空間を皆で享有する。地方においては個人の確立よりもコミュニティの結束のほうが重要であったと考えられる〔58〕。

遊芸は都会と地方において、娯楽を提供するという点では一致しているが、それぞれの生活環境や習慣の違いによって扱われ方が異なる。

### 近代以降の趣味

文明開化〔59〕によって江戸時代の封建社会が刷新され、日本は近代化へ邁進する。それは主に西洋的価値への従属によって行われた。近代化とは「西洋化すること」であるという風潮が浸透したと共に、日本文化への蔑視が生まれた。後にそれは既存の日本文化の駆逐へと動いた。近世に花開いた遊芸は国家権力の強制力をもって否定された。遊芸には娯楽や風俗といった効用しか持ち合わせておらず、それらは近代国家成立のためには何の役にも立たないと判断されたのである。それはプロの諸芸者や遊芸の師匠に対する課税・転職の勧誘・公演の制限といった具体的な行動として現れていた。後にこれらの諸芸能は一瞬、息を吹き返すことになるが、それも西洋人による諸芸能への認識によって180度の価値転換が行われたことが理由であり〔60〕、ここにも西洋への過剰な傾倒を伺うことができる。しかしそれも後には、国家主導による西洋式文化環境の整備とその定着に発する大衆への無意識的教育によって、在来の文化は存在感を失っていった。音楽分野においては、軍隊の導入による軍楽隊の編成、教育機関による唱歌の導入、西洋音楽への憧憬と芸術的価値の過剰な付加等が挙げられるだろう。ちなみに江戸時代において寺小屋〔61〕等で教えられていた遊芸としての諸学問は、近代公教育制度の設置と共にそちらへ移譲され、学術的・学究的に発展することになる。また教養的側面を有していた茶道や華道は後に女性の礼儀作法において必須なものとして、躰教育の一環として幅広く行われるようになった。これらは娯楽としての性質を決して失ったわけではないが、しかしそのように扱われるケースが非常に少なくなったと考える。

近代化の気運の下で西洋の芸能や文化が次々と輸入され、驚きや衝撃と共に広く受け入れられる形で浸透していった。特に都会においてその傾向は顕著であったように思う。それらはまず鑑賞つまり間接的参加に始まり、その後は享受者の興味や欲求に発する実演・実作のための技術習得つまり直接的参加へと向かう。これは江戸時代の遊芸における技芸習得の順序と何ら変わらないが、しかし性急な文化環境の転換によるのか、享受者は当初まず受動的態度をもってそれらに接したようだ。この頃より「趣味」という名称が遊芸に変わる形で使用されるようになった。前時代的な封建社会の雰囲気の色濃く残す「遊芸」という言葉を嫌ったことも一つの理由であろうが、趣味には諸芸における直接的参加と間接的参加という両方の内容が含まれており、より広義の愛好の意味を示していると考えられる。芸の習得を重視した遊芸とはこの点で異なっているだろう。また、遊芸は基本的に師匠と弟子の関係を重視するコミュニティ内において機能していたが、趣味に切り替わったことにより個人で完結する娯楽が出現した。江戸時代における独学・独習の再興であろうか。教授者の不在は趣味の直接的参加における技術の鍛錬を自然と緩めることになる。このことは現在における趣味の意味にも深く通じている〔62〕。

趣味の対象は明治初期から今に至るまで増え続けているようだ。時の推移と共に起きた様々な出来事や諸分野の進歩・発達等に連動して、それらに触発されて多様な新価値が出現し、それと同時に愛好の対象やその方法論が新しく生み出された、または既存の趣味が度々更新される、ということが大きな理由であると考えられる。既存する数々の趣味における個人的・社会的価値の強度の大小は常に流動的であり、新参の趣味の登場とその流行により過去のものが社会の表舞台から姿を晦ますことはあるかもしれない。しかしその存在が完全に消去されることはそう無いであろう。新旧の趣味は個人または多人数による実施や広報活動とは別に、文献への保存等によってアーカイブ化されていることによって、その価値は常に社会に併置されている状態にある〔63〕。誰もがそれを用いて再現・応用・再創造をすることが可能である。現在における情報交換の自由化と簡易化によってそれはより容易に行えるようになった。今や世界中の趣味に触れることも難しくない。

### 現代における遊芸の復活へ

現在は個人が広範囲のあらゆる趣味にアクセスでき、当人の積極性によってそれらに自由に参加できる状況にある。またその執着の程度は十人十色であり、そこには優劣は存在しないだろう。しかしそれとは別として、執着と伝承への傾向が極めて強く残る娯楽が存在しており、それは全国各地に残る祭事や民族・民俗芸能に含まれているのではないかと考える〔64〕。強度を持ったコミュニティが形成され、その中で密度の濃いコミュニケーションが交わされる。師匠や先達による弟子や若輩者への技芸や慣習の指導があり、そこには師弟関係や年功序列が根強い。この状況は都会と地方の両方において発見する事ができる。それらは近代以前の伝統的価値を現在にまで踏襲したものであり、その性質を見る限りそれらは「遊芸」と見なすことが可能ではないか。もちろん全ての地域芸能がそうであ

ると言っているわけではない。芸能を地域外へ広く発信しているものもあれば、門外不出として地域内で秘儀を守っているものもある。地域内外のアマチュア技芸者または愛好家を広く受け入れるものもあれば、全く受け入れないものもある。その姿勢は実に様々である。

先に述べたように、明治時代から長い間、遊芸または娯楽における遊芸的性質は時代の雰囲気反していたことが理由で社会から姿を晦まし、そして趣味という新しい言葉に差し替えられたことで大衆から忘れられた存在となった。しかしそれらは決して失われること無く、人目に触れないところで確実に現代にまで受け継がれてきた。平成の時代に入り、欧米的価値へと大きく偏り続けた日本人の姿勢への批判と検討を経て日本文化のリバイバルが起きたことによって、既存の伝統文化、またはその周辺にある生活環境や教育等に大きな関心が寄せられることになった。地域おこしの気運とその積極的な活動が全国的に行われるようになったことも、その関心を促すひとつの要因として含められるかもしれない。

私はこの論考において、「遊芸」と「趣味」を別のものとして扱いたい。アマチュアの存在に対して寛容であり彼らのコミュニティ参加を基本的に認めている態度を明確に示している日本伝統芸能または民族・民俗芸能全般にあえて遊芸という言葉を用いて、趣味とは性質を異なるものとして捉えたい、と考えている。つまり現在、趣味と遊芸が全国各地にランダムに併置されている、ということである。その理由は次の二つであり、それは遊芸の性質、つまり趣味よりもコミュニケーションの濃度が高く、コミュニティ内での繋がりが強いということから発する。第一に、密接なコミュニケーションが煩わしいと考える人々は趣味を選択するだろう。しかし他者との繋がりを大事にしたいと考える人にとって、趣味の世界では若干物足りないと感じることがあるかもしれない。その場合において、遊芸の世界はもしかすると魅力的なものとして映るのではないか。双方においてメリットとデメリットは存在するが、何をどう思うかは各人次第である。そして余暇をどのように豊かに過ごすかは各人の選択に委ねられる。双方の性質をはっきりさせ、異なる言葉を用いてそれを明確にさせることは、その選択を行う際に有効ではないか。その結果、そこから現れたコミュニティにおける価値観の共有が非常にスムーズに行われると予測する。第二に、現代における遊芸の効用として私が特に重要なことのひとつと考えている内容を提案したい。師弟関係や年功序列を含めた密接なコミュニケーションによって、年配層から若年層への情操教育や社会教育が娯楽の中で、より自然な形で豊かに行われるだろう、ということである。日本はもとより東南アジアの各地において今も続けられている方法である。私は数年前に、マレーシアのボルネオ島とインドネシアのバリ島における地域コミュニティ〔65〕において伝統音楽の指導とそれに付随する情操教育が行われる現場へ参加したことがあるが、それらに共通して発見できたことは、音楽への愛好はもちろんのこと、そのコミュニティへの愛情とその内における個人同士または家族同士の柔らかくも強い信頼関係の存在である。これらの地域にも外来文化はたくさん入ってきているが、人々は伝統音楽が生きている地域コミュニティを好んで選択しているように思えた。伝統音楽には宗教や

伝統行事と密接に関わっているものも少なくない。時に厳格な態度をもって挑まなければならない。しかし音楽そのものには娯楽や交流の要素が大いに含まれているので、数々の技芸を獲得するための厳しい修行も、それら要素があれば楽しみながら乗り越えられるのではないか。若年層、特に子供においてその傾向が伺えるだろう。その達成や完成の喜びをコミュニティ全体で共有できることも重要である。その場は自然と人々を繋いでいき、信頼関係を培っていくだろう。またその経緯の中で、道徳や社会意識における教育も行われているに違いない。最も重要なことは、大人から教育を受ける側にいた子供は年齢を重ねることで大人になり、新しく生を受けて育ってきた子供に教育を施す、ということである。つまりコミュニティが刷新されずに存続する限り、教育の連鎖は永続する。現在において、伝統的な芸能や祭といわれているものは、その思想や組織構造は様々であれ、その連鎖を過去から紡いだことによって獲得した価値の蓄積として、その姿を今に現しているのではないだろうか。

私は今後、遊芸に含まれる諸要素を検討して様々な分野に応用することや、既存または新規の素材を活用した遊芸コミュニティを新しく創造することが、至極有益ではないかと考えている。それは現代社会における諸問題を解決へ導くひとつの手段となり、未来へ永続する価値の発見、つまり未来における“伝統的”価値の創造を促すきっかけとなるかもしれない。

## おわりに

私は本稿において、「都会と地方」「対人コミュニケーション」「遊芸」という3つのキーワードをもとに過去から現代にまで続く歴史を紐解き、そこから重要な素材を抜き出した上で考察を行った。それらから得られた私見には共通の内容を伺うことができる。それは過去に花開いた豊かな価値を現在に再び呼び起こし現在の価値と併置させる、ということである。より掘り下げて言えば、近代以降における生活環境の劇的な変化とそこから無意識のうちに強要される思考の転換により、陰に押しやられてしまった近世以前の価値を再び表に登場させる、ということではないか。私は新旧を融合させた活動こそが創造的であると言いたい。そしてそれは至極日本的である、とも加えたいと思う。

急速な近代化への舵を切った明治維新から今日まで140年と少し経っているが、その期間は江戸時代の半分にも満たない。欧米文化の輸入と浸透は、日本の長い歴史から考えたら微々たる期間の中で行われていたことにすぎない。近代以降の生活環境の変化は確かに目まぐるしく、その振れ幅は他の時代のものよりも大きかったかもしれない。外国由来の価値への執着と氾濫による混乱は近世までの事情とは極めて異なり、それは日本全体として、善悪全てを含めて実に幅広い経験と学びが行われてきたことは事実であろうと思う。しかしやはり、その期間は決して長くないのである。日本人全員に過去から遺伝的に、ま

たは世襲的に、または生活環境から無意識的に、脈々と受け継がれている“日本的”な慣習・感性・思考といったものは、社会の雰囲気によって表出されたり隠れたりすることはあるとしても、完全に駆逐されることはそう簡単に有り得ることなのか？それを行うためにはあまりに大量のエネルギー消費を必要とする。時には残虐な行為を行うことになるかもしれない。しかし日本の近代化はそれを徹底して行ってきたのか？そうではないと思う。これは島国で培われてきた日本の国民性ではないか。中国やヨーロッパの歴史というのは国家や民族の勃興と没落の連鎖であり、そこには常に流血の争いが存在する。そして価値の駆逐が極度の残虐性をもって行われる。自己を守るために他者を滅ぼすのである。確かに日本においても、戦国時代はそのような血生臭い雰囲気を色濃く持っていたが、それは決して歴史の中の主流ではない。また、その感性は気候や食からの影響もあるのではないか。アジアでは農耕が著しく発達した。気候が温暖であることも理由のひとつであろう。それに対しヨーロッパは狩猟が中心である。内陸部や北欧では作物が豊かに育たない。北部では8世紀から12世紀にかけて海賊が頻発した。殺戮と略奪が主流であり、生活そのものとなっていた、といっても決して間違いではないだろう。他にも様々な差異が見つけられるに違いない。

世界各国の人々にそれぞれの国民性があるように、日本にも母国の国民性がある。それは短い期間で用意されたものではない。歴史が醸造するものであり、その根は深い。逆に新興国は歴史を多く有していない。だからこそ歴史に変わる価値をもって国家を意識的にアピールする。いわばそれもひとつの国民性であるかもしれない。「国民」を「民族」や「地域」と書き換えてもいい。規模や種類は異なれどもその内容は同様であろう。

私は、現在の日本人にも、歴史に根ざした確固たる国民性というものが存在する、と考えている。そしてそれは簡単に消えるものではない。または消せるものでもない。それは外からの影響を受けることの無かった鎖国の時期に、若しくはそれより前に日本の各地域において狭く強く繋がっていたコミュニティの中で是として受け入れられてきた価値を、今も是として受け入れることが可能ではないか、ということである。そういった感性を、一人一人が無意識のうちに有しているのではないだろうか。もちろんそれは、新しい価値への偏重等により意識的に否を与えることもあるだろう。個人の嗜好もある。様々な事情も関わってくる。しかしそれらは当人が生まれてから今に至るまで、経験を通して学習してきたものであると考える。重要なことは、そのような素地が存在している、ということである。だからこそ、過去の価値を現在に表出させることが重要である。それらに触れ、既存の新しい価値を含めて検証し応用することによって、自らの感性が最大限に発揮される革新的な創造が行われるかもしれない。

以上が本稿において導き出された総合的な私見である。次稿においては、上方や淡路・阿波の義太夫節または人形浄瑠璃の歴史に注目してそこで行われた活動を参照した上で、この私見を拠り所にしつつ、能勢の人形浄瑠璃における「地域に根ざしたコミュニケーションの活性化」への具体的な創造活動を探る。

## 注釈

- [1] 松浦伸吾『能勢の人形浄瑠璃における創造性① 一文楽、淡路・阿波の人形浄瑠璃との比較を中心に』
- [2] 人形のかしらと衣装、見台、三味線の駒、等。
- [3] 具体的な理由は以下の3点である。①能勢町は大阪の最北端に位置しており、田舎の様相を色濃く残していること。それは現在の大阪府において、中央地域としての位置づけにある大阪市、またはそこに連帯する他の市町村とは幾分異なっている（「都市と地方」）。②人形浄瑠璃芸能の運営のために様々な業種の人々がたくさん関わっていること（「対人コミュニケーション」）。③コミュニティを形成させるための要素がアマチュア芸能活動であること（「遊芸」）。
- [4] 【人口が密集し、商工業が発達して多くの文化施設がある繁華な土地。都市。】『広辞苑』より  
【人が多数住み、行政府があつたり、商工業や文化が発達していたりする土地。都市。みやこ。】『大辞泉』より  
【①人々が多く集まり住んで、商工業や文化の発達した土地。みやこ。都市。】『大辞林』より
- [5] 【人口 50 万以上の市で、特に政令で指定されたもの。】『広辞苑』より  
2011 年 5 月現在、札幌市、仙台市、さいたま市、千葉市、横浜市、川崎市、相模原市、新潟市、静岡市、浜松市、名古屋市、京都市、大阪市、堺市、神戸市、岡山市、広島市、北九州市、福岡市の計 19 都市。
- [6] 【②首府以外の土地。いなか。】『広辞苑』より
- [7] 【①都会から離れた土地。在郷。ひな。地方。】『広辞苑』より
- [8] 「都会」は続日本紀（797）、「田舎」は日本書紀（720）において出典が確認される。
- [9] 持統 8 年（694）に建設された藤原京、後に和銅 3 年（710）に遷都された平城京がある。
- [10] 【②律令制の現物納租税の一。口分田、位田、職田など私有用益を許した田から収穫の一部を現物納させたもの。率は大化改新後おおむね田一段につき一束五把、すなわち収穫の約三パーセント。租の大半は諸国に蓄積して正税と呼び、毎年出挙して利稲を官費に使用。田租。】『広辞苑』より
- [11] 【④律令制の現物納租税の一。大化改新では、仕丁、采女の衣食用として一戸につき布一丈二尺、米五斗。大宝律令制定後は、唐制にならって毎年一〇日間の歳役の代納物とし、成年男子一人につき布二丈六尺または米六斗。奈良・平安時代を通じては、布一丈四尺または米三斗が一般。ちからしろ。】『広辞苑』より
- [12] 【⑥律令制の現物納租税の一。大化改新では田の面積に応ずる田調と戸ごとの戸調があった。七世紀末から唐制にならって成年男子の人頭税とし、繊維製品・海産物・鉱産物など土地の産物を徴収した。分量は、例えば麻布・袴布の場合に一人当たり二丈八尺。ほかに調副物という付加税もある。みつぎ。】『広辞苑』より
- [13] 各集落には一人の首長と大多数の首長に仕える村民がおり、身分制度や税制度などが整理され、小国家として形成していた、という内容において。
- [14] 京都における室町幕府の衰退と共に戦国大名が全国的に乱立、それぞれが支配と領地の拡大のために争った。政治の中心を失った状態。

- [15] 平安時代から明治時代初期の約 1100 年間、皇居は京都に置かれた。
- [16] 【日本の戦国時代、各地に割拠した大領主。守護大名に代って出現。】『広辞苑』より
- [17] 【封建制領主の居城を中心としてその近傍に発達した市街。】『広辞苑』より
- [18] 江戸時代に入ってから、江戸は政治の、大坂は経済の中心を担う。それに対し京都は日本の伝統や文化を長きにわたり継承してきた。
- [19] 【都を定めること。】『広辞苑』より  
 明治以後江戸は東京と名称を変更し都と定め、京都と共に東西両京とした。政府は京都から東京へ移った。
- [20] 江戸時代において三都で振り分けていた政治・経済・文化の三つの分野が、明治時代以降は全て東京へと集約された。
- [21] 富裕町人には納税の義務があり、その代わりに自治体運営への参加が認められた。
- [22] 一例として、建設業における資材調達・資材加工・塗装・組立等の分業化等が挙げられる。現在の事例と同様である。
- [23] 誰もが情報を発信するための手段を得た、という意味において。
- [24] 【①表意文字の一。絵を簡素化して文字として用いたもの。—②絵のような形で、記号や言葉の代りとするもの。】『広辞苑』より
- [25] フランスの発明家ジョセフ・ニセフォール・ニエプス Joseph Nicéphore NIÉPCE (1765-1833)のカメラで撮られたものが最古の写真であるといわれている。
- [26] スコットランドの学者・発明家アレクサンダー・グラハム・ベル Alexander Graham BELL (1847-1922)が 1876 年に発明。
- [27] フランスの発明家であるオーギュスト・マリー・ルイ・リュミエール Auguste Marie Louis LUMIÈRE (1862-1954)とルイ・ジャン・リュミエール Louis Jean LUMIÈRE (1864-1948)の兄弟が 1894 年にシネマトグラフ・リュミエールという名の映写機を発明。映像のみ。
- [28] アメリカの発明家トーマス・アルバ・エジソン Thomas Alva EDISON (1804-1896)が 1877 年に発明。
- [29] コミュニケーションの受信のみを行う機会が現れ、後にその人口が激増したことが挙げられる。
- [30] 有声映画。Talking picture の略。
- [31] それは主に商業・ビジネスに直結した形で現れる。
- [32] この頃の交通手段は徒歩が基本であり、日常生活範囲は制限されていた。特に農村部においてその傾向が顕著である。日本において初めて遠距離交通を可能とさせたのは鉄道であり、その登場は明治 5 年 (1872) である。しかしそれは主に都市部で、限られた区間でのみ運行されたにすぎない。
- [33] 農業では、集落の中で助け合いながら作業を行う。工業や商業においても、様々な職業の人々が業務上において連携する。対人コミュニケーションはその都度頻繁に行われるだろう。
- [34] 【①一定の地域に居住し、共属感情を持つ人々の集団。地域社会。共同体。②アメリカの社会学者ロバート・マキヴァー (Robert. M. MACIVER 1882-1970) が設定した社会集団の類型。個人を全面的に吸収する社会集団。家族。村落など。③群衆 2 に同じ。(「群集」：②地域内に何らかの関係を持って生活する全ての生活個体群。)】『広辞苑』より

- [35] 平成 9 年（1997）兵庫県神戸市須磨区で起きた神戸連続児童殺傷事件や、平成 20 年（2008）東京都千代田区で起きた秋葉原通り魔事件などが思い出される。
- [36] 「すきもの」と読む。後に「すきしゃ」とも。平安時代では主に和歌に執心した人を指していたが、室町時代になると対象が茶の湯に切り替わった。「数奇者」。
- [37] 【平安末期に成立した辞書の『色葉字類抄』に、「数寄」の語があげられて】『数寄の美』より
- [38] 【②みやびやかなこと。俗でないこと。風雅。】『広辞苑』より
- [39] 平安時代における音楽は主に雅楽を指す。
- [40] 【和歌の道。】『広辞苑』より
- [41] 茶の湯に必要な諸道具を、美意識をもって収集または所持し、それらを用いて茶の湯を楽しんだ人をいう。
- [42] 【①茶室。茶席・勝手・水屋などが一棟に備わった建物。囲。②茶室風の建物。】『広辞苑』より
- [43] 田楽には舞と共に音楽が演奏されるが、太鼓とびんささらという、容易に演奏ができる楽器が使用される。びんささらとは田楽を代表する体鳴楽器である。木または竹の多数の小さな板を、片方の端に穴を開けてひもを通して束ね、両端に取っ手を付ける。
- [44] 能・狂言を含めて「能楽」と称する。
- [45] 【謡曲の譜本】『広辞苑』より。
- [46] 【各種の浄瑠璃、特に義太夫の詞章を記した本】『広辞苑』より
- [47] それまでの書物は発行部数が少なく、町人にとっては書物の貸借が基本であり、それを所有することは稀であった。
- [48] 古来より芸能の伝承の際には、師弟関係またはそれに類似するコミュニティ間で、口伝えを中心として行われてきたと考える。また現在においても、日本の芸能はもとより諸外国でも、このような方法で技芸を伝えるケースが少なくない。
- [49] 延喜 18 年（918）～天元 3 年（980）。
- [50] 生没年不詳。
- [51] 『今昔物語集』巻第 24 23 話
- [52] 寛永 19 年（1642）～元禄 6 年（1693）。浮世草子・人形浄瑠璃作家、俳人。
- [53] 【浮世草子のなかで、特に町人の経済生活を主題とした作品。】『広辞苑』より
- [54] 慶安 3 年（1650）～享保 4 年（1719）。儒学者。
- [55] 『元禄文化一遊芸・悪書・芝居』より
- [56] 【①社会生活を営む人間の間に行われる知覚・感情・思考の伝達。言語・文字その他視覚・聴覚に訴える各種ものを媒体とする。】
- [57] 室町時代に生まれた家元制度の序列や、現在における伝統芸能や芸能界等の慣習から推測。
- [58] 地方において個が突出した際に、その周りの人々が行う消極的制裁活動として「村八分」がある。
- [59] 【人知が開け、世の中が進歩すること。特に明治初年の近代化や欧化主義の風潮を言った。】『広辞苑』より
- [60] アメリカ合衆国第 18 代大統領ユリシーズ・シンプソン・グラント Ulysses Simpson GRANT

(1822-1885)における明治12年(1879)の日本訪問。

[61] 【①江戸時代に多くあった営業の手習所。】『広辞苑』より

[62] 【①感興をさそう状態。おもむき。あじわい。②ものごとのあじわいを感じとる力。美的な感覚のもち方。このみ。「一がよい」③専門家としてでなく、楽しみとしてする事柄。「一にピアノを弾く」】『広辞苑』より

[63] 遊芸から趣味に切り替わった明治時代において、新聞や雑誌の発行ないし研究者による論考の発表というものが活発に行われていたようだ。またはそれを行う団体や企業が頻発した時期でもあった。文書化されたものが現在においても必ずどこかに残っており、必要であれば誰でも、それらを参照し歴史を紐解くことができるだろう、という推測より。

[64] 長い歴史を持つ祭事や芸能というのは、その地域の住民の参加が必須であることが少なくないが、その実働に対する対価を楽しみとしている点において共通しており、よってこれらを娯楽の範疇に含めることにした。

[65] マレーシア共和国サラワク州クチン省クチン Kuching 郊外の一軒家におけるサペ Sape /Sapeh のマンツーマン指導と、インドネシア共和国バリ州ギニャール県ウブッ Ubud 中心にて開催されたオダラン Odalan (寺院祭礼) 内における宗教儀式やガムラン演奏空間の様子より。

## 参考文献

足立直郎『江戸時代 芸道の風俗誌』1976 展望社

安部崇慶『芸道の教育』1998 ナカニシヤ出版

天野文雄・須田悦生・渡邊昭五『講座日本の伝承文学 第六巻 伝承芸能の世界』  
1999 三弥井書店

井野辺潔『浄瑠璃史考説』1991 風間書房

今岡謙太郎『日本古典芸能史』2008 武蔵野美術大学出版局

宇野小四郎『日本の人形戯・人形芝居』2003 銀の鈴舎

鎌倉恵子『浄瑠璃・歌舞伎の舞台と上演』2010 森話社

神田由築『日本史リブレット91 江戸の浄瑠璃文化』2009 山川出版社

京都部落史研究所編『近世の民衆と芸能』1989 阿吽社

久保田慶一『都市と音楽』1992 教育芸術社

熊倉功夫編『遊芸文化と伝統』2003 吉川弘文館

倉田喜弘『芝居小屋と寄席の近代—「遊芸」から「文化」へ』2006 岩波書店

藝能史研究会編『日本芸能史・第4巻—中世—近世』1985 財団法人法政大学出版局

『日本芸能史・第5巻—近世』1986 財団法人法政大学出版局

『日本芸能史・第6巻—近世—近代』1988 財団法人法政大学出版局

『日本芸能史・第7巻—近代・現代』1990 財団法人法政大学出版局

後藤和子『芸術文化の公共政策』1998 劉草書房

小林茂『教育社歴史新書〈日本史〉98 近世上方の民衆』1979 教育社

- 小松和彦・野本寛一編『講座日本の民俗学 ⑧芸術と娯楽の民俗』1999 雄山閣出版
- 高木浩志『文楽の芸』1984 東京書籍
- 高橋幹夫『シリーズ「江戸」博物館④ 芝居で見る江戸時代』1998 芙蓉書房出版
- 田中健次『図解 日本音楽史』2009 東京堂出版
- 西山松之助『芸の世界—その秘伝伝授—』1980 講談社
- 林屋辰三郎『近世伝統文化論』1974 創元社
- 『日本芸能史論 第一巻 「座」の環境』1986 淡交社
- 『日本芸能史論 第一巻 「数寄」の美』1986 淡交社
- 『日本芸能史論 第三巻 「手」の芸術』1986 淡交社
- 古川三樹『図説 庶民芸能—江戸の見世物』1982 雄山閣出版
- 水野悠子『江戸 東京 娘義太夫の歴史』2003 財団法人法政大学出版局
- 盛田嘉徳『中世賤民と雑芸能の研究』1998 雄山閣出版
- 守屋毅『近世芸能興行史の研究』1985 弘文堂
- 『近世芸能文化史の研究』1992 弘文堂
- 『元禄文化—遊芸・悪所・芝居 シリーズにつぼん草子』1987 弘文堂
- 山路興造『近世芸能の胎動』2010 八木書店
- 横田冬彦編『シリーズ 近世の身分的周縁2 芸能・文化の世界』2000 吉川弘文館
- 脇田修『近世大阪の経済と文化』1994 人文書院
- 渡辺豊和『天井座敷から江戸を観る』1991 原書房
- NHKデータ情報部編『ヴィジュアル大百科 江戸事情 第一巻生活編』1991 雄山閣出版
- 『ヴィジュアル大百科 江戸事情 第四巻文化編』1992 雄山閣出版
- 『広辞苑』1998 岩波書店
- 『大辞泉』1995 小学館
- 『大辞林』1988 三省堂
- 『伝承のとりくみ 雅楽・文楽・芝居・祭り』2004 財団法人地域創造
- 『日本音楽大事典』1992 平凡社
- 『日本全史 (ジャパン・クロニック)』1991 講談社
- 『邦楽百科辞典 邦楽から民謡まで』1984 音楽之友社
- 『歴史読本特別増刊・事典シリーズ〈第10号〉江戸時代「生活・文化」総覧』  
1991 新人物往来社